

登場人物

赤レンジャー・赤嶺雄太 (29)

青レンジャー・青田龍介 (26)

緑レンジャー・黄島由紀 (27)

黄レンジャー・緑上良樹 (29)

記者 A ～ E

警備員 A

○会議室

記者、カメラマンがズラーっと構えている。

前方の長机の奥に座っている、赤レンジャー、青レンジャー、黄レンジャー、緑レンジャー。

頭上には『パワフルレンジャー記者会見』の看板。

赤レンジャー「この度は、お集まりいただきありがとうございます。早速本題に入らせていただきます。緑レンジャー、お願いします」

緑レンジャー「はい。えー私、緑レンジャーはこのパワフルレンジャーを卒業します」
カメラのシャッター音とフラッシュが一気に盛んになる。

緑レンジャー「ちょうど12年前にヒーローデビューしてからこれまでパワフルレンジャーの一員として、沢山の命、そしてこの地球を守ってきました」

黄レンジャー「(ぼそっと)それ自分で言っちゃう?!」

緑レンジャー「沢山の方々に支えられ、多くの戦いを経験していく中で、新たな夢が生まれ、来ました。これからはその夢に向かって突き進んでいきたいと思っております」

前列の記者席に座っている記者A。

記者A「夢というのは?」

緑レンジャー「学業に専念します。来年からアメリカに留学に行く予定です」

後ろの方に座っている記者B。

記者B「緑レンジャーが卒業となると、パワフルレンジャーは3人になってしまいますが、正義の味方として国民の安全を守ることができるのでしょいか」

緑レンジャー「はい。3人ともとても強いヒーローなので心配ありません」

記者B「人数が減ったことで、悪の組織であるデビルズから甘く見られる心配もありますか?」

青レンジャー「俺らそんな弱そうかな」

黄レンジャー「そりゃそうでしょ。だって3人だよ？赤、青、黄。ただの信号じゃん」

青レンジャー「確かに。でもビジュアル的に言うと緑レンジャーの方が俺より青信号っぽくない？」

黄レンジャー「じゃあ、あんたが卒業すれば？」

ため息をつく青レンジャー。

青レンジャー「……出来るもんなら」

黄レンジャー「……とっくにしてるわよね」
真っ直ぐ前を向きながら、小声で会話をしている青レンジャーと黄レンジャー。

緑レンジャー「これまで僕たちは何度もデビルズとの戦いに勝利してきました。デビルズもパワフルレンジャーの強さは十分理解していると思います」

一番前でピシッと手を上げる記者C。
緑レンジャー「どうぞ」

緑レンジャー、記者Cを指す。

記者C「先日、悪の組織デビルズの幹部であるデビルクイーンとの熱愛が報道されましたが、その件と今回の卒業は何か関係しているのでしょうか？」

赤レンジャー「その件につきましては以前ご説明させて頂いた通り、事実とは異なる情報です。円滑に会見を進めるためにも、その件についてのご質問はお控えください」

記者C「熱愛が事実だから、卒業するんじゃないんですか？もしかして国民に恐怖を与え続ける敵の幹部と海外に逃げるんですか？」

立ち上がろうとする赤レンジャー。
赤レンジャーを制止させる緑レンジャー。
シャッター音とフラッシュが盛んになる。

緑レンジャー「もう一度改めて訂正させていただきますが、私とデビルクイーンとの間

にはそう言った関係はございません。今回の卒業の件につきましても先ほどご説明させて頂いた通りで、デビルクイーンは一切関係ございません」

端に座っている記者D。

記者D「本当に、本当にそうでしょうか！

元々6人いたパワフルレンジャーも半分になっってしまうんですよ！闇営業で解雇された桃レンジャーも！怠慢疑惑で引退したゴールドレンジャーも！次は敵との熱愛疑惑で卒業の緑レンジャーですよ！もう国民はあなたたちのことを信用できません！」

記者たちから同意の声。

緑レンジャー「過去の件につきましては……」

拳をぐっと握る赤レンジャー。

黄レンジャー、ガツと立ち上がる。

黄レンジャー「あの！」

シャッター音とフラッシュが盛んになる。

黄レンジャー、我に帰ってスツと座る。

黄レンジャー「……何なんですか、さつきから。緑レンジャーはこれまで一生懸命戦ってきたじゃないですか！国民のために！あなた達国民のために命をかけて戦ってきたじゃないですか！」

緑レンジャー「黄レンジャー……」

黄レンジャー「これからもずっとそうじゃないといけないんですか？永遠に命懸けで戦い続けないといけないんですか？」

記者D「そうは言ってません。正義の味方として理由が汚れていませんかと言っているんです」

青レンジャー「桃レンジャーはいろんな病院を回って入院している子供達とたくさん交流していました。ゴールドレンジャーは毎日毎日、体が不自由な母親の介護をしていました。これは、闇営業でしょうか。怠慢でしょうか。彼らも国民を一生懸命守ってきたとは言えないでしょうか」

記者D「では敵との恋愛も許容しろと言うこ

とでしようか！それでも正義の味方と言えますか！」

長机をバコンッと叩く赤レンジャー。

赤レンジャー「だから、事実ではないって言ってるじゃないですか！」

シャッター音とフラッシュが盛んになる。

緑レンジャー「……正義」

一点を見つめている緑レンジャー。

緑レンジャー「正義って一体なんですか」

徐々に静かになっていく会場内。

緑レンジャー「正義って、ヒーローって一体何なんですか。国民を守ることだけが正義なんですか。皆さんにとっても、親、友達、学校の先生、そういった方々が正義のヒーローだったと思うんです。そしてそんな身近な人達の味方に、ヒーローになりたいと思ってるんじゃないですか？」

完全に静まり返っている会場内。

緑レンジャー「僕らも同じなんです。これま

で沢山の国民の皆様を守ってきました。今度は大切な誰かを全力で守りたいんです」
最前列に座っている記者E。

記者E 「……ってことは」

緑レンジャー「以上です」

頭を下げる緑レンジャー。

シャッター音とフラッシュが今までで一番激しくなる。

横の入り口が突然開く。

息切れしている警備員Aが入ってくる。

警備員A 「パワフルレンジャー！ 出動要請で

す！ 渋谷でデビルマンが暴れています！」

立ち上がろうとする緑レンジャー。

緑レンジャーを止める赤レンジャー。

赤レンジャー、胸に手を当てる。

赤レンジャーが光に包まれる。

光が収まり、姿があらわになる赤嶺雄

太（29）。

黄レンジャー、緑レンジャーも胸に手をあて光に包まれる。

姿があらわになる、青田龍介（26）、

黄島由紀（27）。

ざわついている会場内。

緑レンジャー、胸に手をあて光に包まれる。

姿があらわになる緑上良樹（29）。

真っ直ぐ前を向いて座っている、赤嶺、青田、黄島、緑上。

赤嶺「僕らも人間です。正義と何なのか、ヒーローとは何なのか。嫌というほど僕らに付き纏っているこの問題について、皆さんも頭を抱えてよく考えて頂きたいです」

完全に静まり返っている会場内。

警備員の無線機から、

男性の声「負傷者多数！早くパワフルレンジャーに出動を！国民の命が！国の存亡がかかってるんだ！早く！」

静まり返った会場内に聞こえ渡る無線機の声。

動かずにジッと前を見て座っている、

赤嶺、青田、黄島、緑上。

無線機から、

男性の声「何をしている！聞こえているのか！早くパワフルレンジャーを出動させろ！」

無線を持ったまま、困惑している表情の警備員A。

緑上「行こう」

立ち上がって会場を出ていく、緑上、赤嶺、青田、黄島。

警備員A「……今、出動しました」

走って後をついていく警備員A。

揺れている胸の無線機から、

男性の声「そうか。それとなぜかデビルクイーンが現れてデビルマンを押さえつけようとしているんだが。これは一体……」